

十三夜と高松城址薪能^{じょうしたきぎのう}

「十三夜」という樋口一葉の短編小説に、「今宵^{こよい}は旧暦の十三夜^や、旧弊^{きゅうへい}なれどお月見^{まねごと}の真似事^{いしらい}に団子をこしらえてお月様にお備え申せし」（注）とあります。「十三夜」は旧暦9月13日の夜のこと。今年^{ことし}は10月27日がそれに当たります。古くから、旧暦8月15日の「十五夜」の中秋の名月とともに、この季秋の名月を「後の月」とも言っ^て、愛でて鑑賞する風習があったようです。

この「十三夜」のちょうどひと月前の旧暦の8月13日に当たる9月28日の夜、玉藻公園桜の馬場で10年ぶりとなる「高松城址薪能」が開催されました。当日は秋晴れの空が広がり、絶好のコンディション。彼岸を過ぎて日もだいぶ短くなり、暮れなずむ空にひと月早い十三夜の月が昇り、若干控えめながらも煌々^{こうこう}とした輝きを放っていました。玉藻公園の桜の馬場への道の脇には、見事な松盆栽が飾られ、また、庵治石などを使った石あかりが足下を照らして、雰^{ふん}囲気を盛り上げていました。新涼の張りつめた空気の中、虫の音がわずかに聞こえ、舞台前に4本しつらえられたかがり火のあかりとこの月のあかりに照らされて、幽玄で典雅な世界が繰り広げられました。

この薪能は、日本の誇るべき伝統芸能である能楽の普及宣伝活動を行っている「NPO法人せんす」の代表 橋岡佐喜男さんが、自分を能の世界に導いてくれた祖父橋岡久太郎さんの生まれ故郷である高松の地でぜひとも薪能公演をやりたいと、企画を持ち込まれたものです。文化庁の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業に選定され、本体事業は文化庁の助成によりほとんどが賄われました。

演目は、狂言「棒縛^{ぼうしばり}」と能「船弁慶^{ふなべんけい}」。いずれも一般になじみのある分かりやすいものでした。特に船弁慶は今年^{ことし}の大河ドラマ「平清盛」にも繋がり、源平合戦の古戦場である屋島を有する高松で演じられることは非常に時宜を得たものとなりました。また、今年^{ことし}は玉藻公園の披雲閣が重要文化財の指定を受けたこともあり、記念のお祝いの舞としても意義があったと思います。

薪能公演の2日後の中秋の名月。台風の影響を受け、十分楽しむことができなかつた人も多いことと思います。さて、今年^{ことし}の「後の月」は如何^{いかが}でしょう。

（注）「たけくらべ 樋口一葉」（集英社文庫）より